

英語と九州方言： 動詞の文法形式と社会的意味に見られる共通性

谷川 晋一

1. はじめに：九州で英文法を教える上で

筆者は、英語と日本語の文法と意味に焦点を当てた研究を行っている言語学者である。長崎県西海市出身で、大学教員としては、2016年4月より、九州の人文系の学部において、英文法や英語学概論に相当する科目を担当している。これらの科目を履修する学生たちも多くが九州出身であるため、授業担当者と履修者の両方が九州方言の母語話者という環境で、英文法に焦点を当てた授業を展開している。このような環境の中で、学生たちが少しでも英文法に興味を持ち、母語との対照の観点から、少しでもわかりやすく英文法を理解できるように、英語と九州方言に見られる共通性に着目したトピックを扱うようにしている。

本稿は、その中でも、動詞の文法形式と社会的意味に関わるトピックを、筆者が実際に行っている授業内容の概説に相当する形で、取り上げたい。本稿で扱う内容は、九州方言に馴染みのない読者にとっては、真新しい知識になると思われるが、当該科目の履修者同様に、少しでも文法・語法に関して理解を深めるきっかけになってもらえれば幸いである。

なお、本稿の言う九州方言は、長崎県、佐賀県、熊本県、東北部を除く福岡県地域で主に用いられる肥筑方言を大筋で指すものとする。本稿が取り扱う現象は、上記以外の九州地域や西日本で用いられる方言にも見られると思われるが、筆者の母語方言でもある肥筑方言での観察を前提に話を展開していく。

2. 到達・瞬間動詞

2章と3章では、アスペクト(相)の観点から、動詞の文法形式を見る。アスペクト(相)とは、出来事と時間の関係性を示す文法的概念であるが、英語と日本語における動詞(述語)のアスペクト(相)に関する著名な研究として、Vendler (1967)と金田一(1950)がある。これらの研究では、どのようなアスペクト

的意味特性を持つか、be ing形・テイル形と整合可能かといった観点から、動詞を4つのカテゴリーに分類している。

Vendlerと金田一の4分類は、完全に同じではないが、共通点も多い。例えば、動詞が表す出来事に時間的な幅がなく、動作行為が瞬間的に終わる分類を設けている点はその1つである。例としては、*arrive*, *die*, 「到着する」「死ぬ」等が挙げられるが、このような動詞を、Vendlerは到達動詞、金田一は瞬間動詞と呼んでいる。本稿では、これらの動詞をまとめて、到達・瞬間動詞と呼ぶことにする。

日本語の到達・瞬間動詞は、(1a, b)のように、接辞テイルを接合すると、完了相当(結果・状態)の意味を表す。

- (1) a. 電車が駅に到着している。
b. アリが死んでいる。

(1a, b)が表す意味は、「電車が駅に到着済みである」「アリが死んでしまっている」である。英語で表す場合、“The train has arrived”のようなhave過去分詞を使った完了形の使用が適当である。

その一方で、英語の到達・瞬間動詞は、(2a, b)のように、be ing形にすると、近未来の意味を表す。

- (2) a. The train is arriving at the station.
b. Ants are dying.

通常、be ing形は、時間に幅がある動詞の場合、動作行為が進行途中であることを表すが、到達・瞬間動詞の場合、動作行為が起こる前段階が進行途中であることを表すと捉えられる。

ここで重要なのは、(2a, b)のbe ing形が表す近未来の意味を日本語で解釈する場合、単純に、テイル形では表せないという点である。上述のように、当該動詞のテイル形は、完了相当の意味になってしまうため、(2a, b)は、「電車が駅に到着しようとしている」「アリが死にかけている／死にそうだ」のように、複合的な形態を用いて解釈する必要がある。

以上を踏まえた上で、ここから九州方言に目を向けた。九州方言では、進行と完了の意味的な違いに基づいて、標準日本語のテイル形を形態的に区別する。(3a, b)に示すように、「食べてしまっている」を表す完了相では接辞トルを、「食べている最中」を表す進行相では接辞ヨルを動詞に接合する。

- (3) a. 太郎がリンゴを食べとる。 [完了]
 b. 太郎がリンゴを食べよる。 [進行]

このヨル・トル形式やそれに類似した2つの形式での区別は、九州方言に限らず、西日本地域の方言の多くに見られる(国立国語研究所(1999), 井上(2016))。

九州方言が興味深いのは、到達・瞬間動詞にヨル形式とトル形式の両方が使える点である。

- (4) a. 電車が駅に到着しとる。
 b. 電車が駅に到着しよる。
 (5) a. アリが死んどる。
 b. アリが死による。

(4a), (5a)のように、トル形式で完了相を表すのは、標準日本語と同様であるが、(4b), (5b)のように、複合的な形態に頼らない、単純なヨル形式で近未来の意味を表せる点が大きな違いである(漆原(2005))。

まとめると、九州方言は、当該文法に関して、標準日本語よりも英語に近いと言える。英語の到達・瞬間動詞は、be ing 形と have 過去分詞形で意味が異なるが、九州方言も同様で、英語の be ing 形が表す意味をヨル形式で、have 過去分詞形が表す意味をトル形式で表すことになる。この共通性を考慮に入れると、英語の進行相(2a, b)を九州地域の学生に説明する際には、(4a, b), (5a, b)の方言例を出すことで、より円滑な理解を促進できると考えられる。

3. 状態動詞

Vendler と金田一の4分類の中で、名称と概念が共通しているのが状態動詞である。状態動詞とは、変化を伴わない静的な状態を表し、その状態が永久に続く動詞と定義される。英語では、*know*, *love*, *resemble*、日本語では、「いる・ある」「できる」「要する」等が典型的な動詞として挙げられる。

状態動詞は、一般に、単純形式で表すのが標準で、be ing 形・テイル形とは整合不可能である。ただし、一部例外もあり、当該形式での使用が容認され

るものもある。例えば、(6a, b)では、状態動詞に分類される *love* が be ing 形で用いられている。

- (6) a. I'm loving this trip.
 b. They are loving the game.

Thomson and Martinet (1969:97), Huddleston and Pullum (2002:170)によれば、(6a, b)の *love* は、「楽しむ、堪能する」を表す *enjoy* に相当するもので、静的な特性を持つ状態動詞というよりも動的な活動を表す動詞に近いものとして機能している。

日本語でも、方言の場合、状態動詞「ある」がテイル形で使用されることがある。例えば、九州方言では、(7a, b)のテイル相当形がよく使用される。

- (7) a. 302 教室では、英文法の授業がありよる。
 b. 302 教室では、英文法の授業があっている。
 (7a)の「ありよる」は、「ある」に進行相の接辞ヨルを接合した形で、(7b)の「あっている」は、井上(2016)等の方言研究者の分析によれば、「ありよる」を標準語に近づける形で作られたものである。

これらの文が表す意味は、「英文法の授業が行われている最中だ」である。つまり、「ある」が当該形式で使用されると、意味的には、「行われている、開催されている」等の活動的な動詞の受身形に相当する(国立国語研究所(1999)も参照)。この点は、以下の事実からも支持される(漆原(2005))。

- (8) a. 会議／運動会／ライブがありよる。
 b. *リンゴ／辞書／ゴミが机の上にありよる。
 当該形式で使用可能な主語は、「授業」以外だと、(8a)に示すような事象・出来事を表す名詞に限定され、(8b)に示すようなモノを表す名詞は容認されない。(*は容認不可を表す)

このアリヨル・アッテイル形式は、九州地域の人間に深く染み付いているものだと言える。筆者は、2023年3月まで7年間、長崎にある大学で教鞭をとっていた。その際に、長崎出身で、生まれてこの方30年以上、九州北部でしか生活したことがない大学事務職員と方言に関して雑談したことがある。その事務職員いわく、「私は、長崎出身で、九州から出たことがないんですけど、方言はほとんど使わないですよ」ということであつた。しかし、その事務職員が書いたメールを見ると、「試験があっていますので、302 教室は使用できません」のような文が書かれてあり、大笑いしたことがある。この笑い話にあるぐらい、アッテイル形式は、標準語だ

と思っていたが実は方言だったという、いわゆる、「気づかない方言」の類として九州地域の人間に定着してしまっているのである。長崎にいた当時の在籍学部には、北海道や関東、関西も含め、九州以外の出身学生が多かったが、彼らに尋ねてみると、指摘したことはないが、当該形式にずっと違和感を抱いていたという者が多かった。

現在、在籍している福岡の大学でも、アッテイル形式は、メールや掲示物によく見られる。授業で学生に尋ねると、(7b)を標準日本語でも容認される形式だと思ひ込んでおり、これが方言だったと聞くと、驚く学生が多い。

このように、英語と九州方言には、通常、整合不可能だと言われている *be ing* 形・テイル形で状態動詞が現れることがあり、意味的には、動的な活動を表す動詞に相当するという共通性が見られる。

4. 動詞(形式)に付随する社会的烙印

本稿では、最後に、動詞自体や動詞の文法形式が持つ社会的意味に焦点を当てたい。一般とは異なる発音や語、文法形式を用いることで、身分階級が低い、教養・教育が欠如している、野蛮であるといった負のイメージを伴うことを表す「社会的烙印」を軸に話を進めていく。

英語における社会的烙印の例は数多くあるが、音声面では、語頭の *h* の脱落、文法面では、否定語 *ain't* の使用が代表例として挙げられる。英語では、1066年のノルマン・コンクエスト以降、フランス語の影響を強く受け、*house* のような語で、語頭の *h* を発音しないことが標準となった。しかし、その後、パラダイム・シフトが起き、当該 *h* 音の脱落は、社会的烙印とみなされる傾向が強くなった。現代英語では、*hour*, *heir* 等のいくつかの語を除き、語頭の *h* を発音することが標準で、当該音を脱落させると、一般に、粗野で野蛮だという印象を抱かせてしまう。否定語 *ain't* の使用も同様の印象を与える傾向が強いが、不良っぽさや荒々しさをあえて出すために、当該語を楽曲の歌詞等で頻繁に用いたりもする。

九州方言にも社会的烙印に結びつきやすい語がある。(9)の下線部で示す動詞「がられる」である。

(9) 掃除をさぼりよったら、先生にがられるぞ。

この「がられる」は、「叱られる、怒られる」を意

味する動詞で、「がる」という能動形は容認されず、「がられる」という受身形での使用が必須である。筆者の個人的な印象だが、当該語は、少なくとも、筆者の出身地である長崎では、広く認識・使用されている語であった。学部卒業に伴って、出生後ずっと住んできた長崎を離れる2003年までの筆者の記憶をたどる限り、長崎の人間たちは、方言で喋る際に、「がられる」をごくごく普通に使用していた。

本稿が「がられる」を取り上げた理由は、8年ほど前に、当該動詞の使用傾向に関して、筆者が大きな驚きと衝撃を覚えたからである。長崎にある大学で教鞭をとっていた当時、長崎出身の学部生2人に、「君たちも「がられる」って使うよね？」と尋ねたところ、「意味はわかりますけど、「がられる」は、あまり使わない方がよい動詞だという認識です」という返答であった。よくよく聞いてみたところ、彼らの世代にとって、「がられる」は、粗暴な言葉で、俗にヤンキーと呼ばれる不良たちが好んで使用する印象が強いということであった。彼ら自身が当該語を使用することはないが、周りにいた、そのような人物たちが頻用していたため、意味は認識できるということであった。長崎出身の他の学部生にも尋ねてみたが、同じ認識を持つ者が多かった。

どうやら「がられる」の使用に関しては、世代間で負のイメージが伴うか否かの違いがあるように感じられた。この話をゼミで話したところ、その当時のゼミ生の1人が関心を持ち、ゼミ研究の一環として、「がられる」の使用傾向に関して、オンライン・フォームを用いた簡単な調査をしたことがあった。この調査によると、「がられる」は、長崎、佐賀、福岡南部等での認識・使用率が高かったが、世代間で社会的意味の捉え方が異なるという結果が得られた。10代や20代では、当該語に「粗暴な、不良が使う」といった負の意味を感じる者が多い一方で、30代以上では、そのような負の意味を感じず、「叱られる、怒られる」相当の一般的な方言語として、認識・使用している者が多いという結果であった。理由までは、わからなかったが、上述の学部生たちが言っていたように、若い世代では、当該動詞の使用が特定の社会層に限定されているのかもしれない。

この調査は、あくまで学部生が行った実験的なものに過ぎないが、筆者が英文法や英語学概論の授業で、この話をする際には、しっかりとした手法に基

づいて実施されている調査研究と併せた説明を行うようにしている。その1つがアイルランド英語に焦点を当てた嶋田(2017)である。嶋田は、(10a, b)に示すような、当該英語方言に特徴的な語句や文法形式に関して、約60名のアイルランド人を対象にアンケート・インタビュー調査を行っている。

(10) a. How's the craic?

b. I do be getting up at 7 every day.

(10a)の *craic* は、アイルランド語で「面白い話、楽しみ」を意味する名詞で、文全体としては、標準英語の “How are you?” に相当する。(10b)の *do be ing* 形式もアイルランド語の文法を包摂したもので、習慣を表す文法形式として用いられる。嶋田による調査の結果、(10a)は、アイルランドらしさがある表現で、好んで使用するという回答が多かったが、(10b)の *do be ing* 形式は、「悪い文法、間違った文法で、使うべきではない」「年配の人が使用するのわかるが、若者が使用していたら積極的に訂正する」という回答が多かったと嶋田は報告している。この違いは、*do be ing* 形式が貧しい時代のアイルランドにおいて学校に通っていなかった人物たちが使用する、教養の無さを象徴する文法形式であるという捉え方が強いことに起因するようである。この傾向が更に進めば、住人たちによる言語選択の結果、アイルランド英語やアイルランド語の衰退が強まることになってしまいかねない。

言語の衰退や消滅には、さまざまな要因が関わるが、社会的烙印に起因するところが大きな影響を与える場合がある。言語は、時代とともに変化し、遷りゆくものであるが、自分たちのルーツとなる土地や居住する土地において、どのような言語が用いられてきたか、どのような特徴を持つかについて意識的に知ることは、歴史を未来に引き継いでいくことにつながる。英文法や英語学概論といった授業では、文法・語法に関して、純然たる言語学的視点から理解を図ることが最優先であるが、殊に外国語学部や文学部といった環境で学ぶ上では、可能な限り、言語の社会性にも目を向ける機会を作ることが重要であろう。その方法の1つとして、学生の多くにとって馴染みがある日本語の方言を交えながら、英語をはじめとする言語一般での社会性に関わる事実を見ることは、非常に有意義であると考えられる。

5. おわりに

以上、本稿では、動詞の文法形式と社会的意味の観点から、英語と九州方言に見られる共通性を示した。一般に、英文法や英語学概論を担当する際に、英語・日本語の対照を取り入れることはしばしばあるであろうが、標準語にとどまらず、方言まで足を踏み入れることで、より興味深く、より効果的に学べる内容に発展させることができるはずである。本稿の内容は、筆者の授業実践に即したものであったが、筆者と同じように、英文法・英語学を教える読者にとって、ほんの僅かではあっても、有益なものになれば幸いである。

参考文献

- 井上史雄(2016)「西日本、方言の使い分け発達」日本経済新聞会員限定記事「現代ことば考」
<https://www.nikkei.com/article/DGKKZO08900090Y6A021C1BC8000/> 【2024年2月26日閲覧】
- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15, 48-63.
- 国立国語研究所(編)(1999)『方言文法全国地図 第4集：表現法編1』財務省印刷局.
- 嶋田珠巳(2017)「社会言語学の課題：ことばの選択を考える」西山佑司・杉岡洋子(編)『ことばの科学』97-126, 開拓社, 東京.
- 漆原朗子(2005)「相の統語的認可と形態的实现：東京方言、北部九州方言および英語の比較による考察」大石強・西原哲雄・豊島庸二(編)『現代形態論の潮流』175-197, くろしお出版, 東京.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Thomson, Audrey Jean and Agnes V. Martinet (1969) *A Practical English Grammar (Second Edition)*, Oxford University Press, London.
- Vendler, Zeno (1967) “Verbs and Times,” *Linguistics in Philosophy*, ed. by Zeno Vendler, 97-121, Cornell University Press, Ithaca.